

Title	ディ - チェルの公債論
Author(s)	鹽見, 眞澄
Citation	經濟論叢 (1932), 34(4): 777-784
Issue Date	1932-04-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/130161">http://dx.doi.org/10.14989/130161</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第

卷四十三第

行發日一月四年七和昭

## 論叢

動的資本と課税

法學博士 神戸 正雄

社會理念とイデオロギイ及びミースト

文學博士 米田 庄太郎

マルクスに於ける精神科學的方法

經濟學博士 石川 興二

## 時論

上海事變を通じて見たる日支關係

經濟學博士 作田 莊一

## 研究

大量觀察に於ける理論と技術

經濟學士 蜷川 虎三

國勢調査の性質に就て

經濟學士 岡崎 文規

燒津鯉漁業に於ける船仲組織

經濟學士 岡本 清造

アルフレッド・ウニバーの工業集積理論について

經濟學士 菊田 太郎

## 說苑

經濟學と經營學との境界線に就て

經濟學士 谷口 吉彦

東海道濱松宿に於ける人馬遣ひ方について

經濟學士 大山 敷太郎

デイーチエルの公債論

經濟學士 鹽見 眞澄

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

## デューチエルの公債論

鹽見眞澄

### 第一、序言

凡そ學者の公債に對する態度は、これを三つに大別し得られる。悲觀的態度、樂觀的態度及び折衷的態度が即ちこれである。而してこの三つの態度は同時に公債に對する學者の態度の歴史的發展を、大體に於て示すものであると云つても大過なからう。この公債學說の史的發展に於て最も重要な地位を占むる學者の一人は、樂觀論の代表者たるカール・デューチエルであ

- 5) 拙稿、助郷と農民の生活(本庄博士編「日本交通史の研究」所收)
- 6) 「濱松宿御役町由來記」(寫)
- 1) Bruno Moll, Lehrbuch der Finanzwissenschaft. S. 114.  
神戸博士、財政學大系、541頁

る。<sup>2)</sup>

凡そ公債を論ずるに當つては、單に公債それ自身に止るを得ない。蓋し公債は臨時費支辨の一方法であるから、臨時費を支辨するに當り、公債以外の方法に依るべきかを明らかにする必要がある、勢ひ準備金、(Staatszusch.)又は租税と公債との何れを選択すべきかを考究せねばならぬからである。歴史的に觀察すれば、その初めに於て論ぜられたのは準備金と公債との得失如何であつたが、時代の進歩と共にこの問題は次第に重要性を失ひ、これに代つて公債と租税との優劣如何が新たに問題とせらるゝに至つた。故にデューチエルの國債論を扱ふに當つても、専ら視野を公債と租税との比較問題に集めて研究を進めたい。

## 第二、デューチエルの國債論の概要

デューチエルの國債理論は、一八五五年に發行せられたるその名著「國債の體系」(Das System der Staatsanleihen)に現れてゐるから、専らこれに従つて研究を進める。

### (一) 國債に對する根本的立場

デューチエルは、

國民經濟と國家又は財政との間に緊密なる内的關係あることを認め、國家信用は國民經濟進捗の一大槓杆であり、國債制度は文化の最高段階を表はすものであると考へた。<sup>3)</sup>彼の國債理論はその特有なる生産説及び資本説を基礎としてゐる。即ち彼に従へば、生産には有形的生産と無形的生産とがあり、従つて資本は有形的生産のみならず、無形的生産にも關係を及ぼすものである。更にアダム・スミスが國家の行爲は不生産的であり、従つて國家の經費は浪費であると説いてゐるのを彼は全くの誤りなりとしてゐる。彼の考によれば、スミスの誤解は國民經濟と國家従つて財政とを切りはなし對立せしめる所から生ずるのである。然るに實際に於ては國民經濟と國家従つて財政とは相互に緊密なる關係に立つものであり、國家の行爲は假令それが直接には何等有形的なものを生産しなくとも、それが國民經濟に於ける生産を促進し、又は支持することにより、究極に於ては生産的であると云ふ。この故に彼によれば國家の行爲はすべて生産的であり、従つて國家の經費もまた生産的となるのである。

デューチエルは國家經費をその効果の時間的繼續に

2) Carl Dietzel, Das System der Staatsanleihen. Heiderberg 1855.

3) Dietzel, a. a. O, s. 203.

よりこれを二つに別ち、經費充足の二原則を樹立したのである。<sup>4)</sup>即ち國家の固定資本—*stehendes Capital*なる語を用ひ、國家がその職分を遂行するために持續的に保有するもの、例へば官廳の建物、軍艦、兵營等を指す、——は、その利用が將來に及び現在の租稅負擔者がその對價を全部享けることが出來ないから、これを國債によつて充足せねばならないと云ふのである。尙デイーチエルはこの際 *müssen* の文字を用ひ、ワグナーが *dürfen* の文字を使用してゐるのと好對照をなしてゐる。<sup>5)</sup>これに反し國家の流動資本——*unlaufendes Capital*なる語を用ひ、國家事務に従事する人々に下附するもの、その他固定資本の維持に必要なものを指してゐる、——は、その價値が全く各時期に消盡するものであるから、國民各自の平等なる出資 (*Beitrag*) 即ち租稅により充足されねばならないと云ふのである。斯くして彼は國債により支辨さるべき場合を明確に定めたのである。從來國債を以て一の例外的支辨方法と看做し、起債によることを以て財政上の不幸事 (*Unheile*) なりと考へたのに反し、國債に對し自然的支辨方法たるの地位を與へた點に、デイーチエルの財政學史的の

地位を認めるとが出来る。

## (二) 國債の長所と短所

デイーチエルの國債に對する根本的立場は大體以上の如くであるが、以下に於ては稍詳細に、彼が種々の點よりして國債の長所を擧げ、その短所を擁護せるを見よう。これを分つて國民經濟上、財政上、社會政策上、政治上及び道義上の五點とする。

### A 國民經濟上

デイーチエルは國債の國民經濟上に有する意義を論ずるに、最もその力を注いだ。彼に従へば國債は國民經濟上次の如き長所を有する。

國家は起債により國民經濟より貨幣を得るのであるが、この貨幣は國家が必要とする物資又は勞役を購ふために再び國民經濟へ復歸するものであり、結局に於ては國家は起債によりて國民經濟よりその生産物を得る譯である。<sup>6)</sup>而してこの新たに生じた國家の需要は、勞働給付の増加、自然力により、一層の利用等に基く生産の増進又は國民の消費節約によりて充されねばならない。通例消費節約の方法は採られないから、國債は國民經濟上生産を増進せしむるの利點を有する。<sup>7)</sup>

國債は又國民經濟の全資本の効果を進むるの長所を

4) Dietzel, a. a. O. s. 152.

5) Adolf Wagner, Die Ordnung der Finanzwirtschaft und der öffentliche Kredit. S. 786.

6) Dietzel, a. a. O. S. 192.

7) Dietzel, a. a. O. s. 194.

有するのである。即ち國債は云はゞ資本所有者の合同機關であり、各資本所有者は他に一層有利なる投資口を見出す時はこれを去り、他に良好なる投資口を見出し得ない時は、國債に來集するのである。前の場合に於ては、國債は有利な企業にそれが必要とする資本を調達することを可能ならしめるのであり、後の場合に於ては、資本が不利なる所に投下せられ、又は享樂のために消費せられ、或はまた死藏せらるるの不利を國債が避けしむるのである。斯くして國債はすべての資本を聯絡して、各時各所に適當にこれを分配する大なる中央機關たるの機能を有する<sup>8)</sup>。

國債は尙ほ亦貯蓄をすゝめるの長所をも有するのである。租税を餘りに高くする時は、生産者の資本は侵され、ために彼等の所得は著しく減じ、これと共に勞働の喜び並に經濟的エネルギーが甚だしく損ぜられるの結果を來し、一面に於て貯蓄及び新資本の形成の可能性が消失し、他面に於ては、それへの刺戟が消失する。これに反し、國債收入を眼中に置き租税を適度の高さに保つ時は、個人の經營資本は弱めらるゝことなく、却つてこれにより勤勉貯蓄を促せられるのであ

る。又自己の遊資を以て國債に應募するものは、勞働の増加、消費の減少により、これを再び蓄積せんと力め、新資本の形成を促すに至る<sup>9)</sup>。

更に忘るべからざることは、國債による時は外資の援助を得らるゝの利益あることであり、これは租税にては到底望むべからざる所の長所である。これには二つの場合が存し得る。第一に、一事業に必要とする大資本を容易且つ迅速に集中せしむることであつて、この意味に於ては、資本の豊富な國にあつても、外資は有用である。第二に、外資により國民經濟全體の生産を活潑ならしむるの作用であり、貧國が富國の資本を求むる場合に發生する。國債制度に基く斯くの如き諸國民の協力は、一の共同經濟、——即ち世界經濟への道を開くものである<sup>10)</sup>。

以上の如くデューチエルは國債が國民經濟上多大の効果を有するものとして次のやうに結んでゐる。曰く「國債の利子が全國家經費のより大なる部分に達すれば達する程、一國民は富み、その國民經濟は榮え、且つ進歩する<sup>11)</sup>。」と、而して彼はこれが實例として英國をあげてゐる。

8) Dietzel, a. a. O. s. 203.

9) Dietzel, a. a. O. s. 176.

10) Dietzel, a. a. O. s. 200.

11) Dietzel, a. a. O. s. 200.

猶ディーチェルは國債の償還に付ても、主として國民經濟上の立場から論じてゐる。即ち國債の償還は手段であつて目的であつてはならない。<sup>12)</sup> また償還は必しも必要ではない。たゞ國家信用を維持するがために必要なるか、又は國民經濟がこれを希望する時にのみ一部の買上償還が行はるべきであると云ふ。

**B 財政上** ディーチェルは臨時費支辨方法として準備金、租税及び國債の三者を挙げ、この中國債が最も勝れりと説くのである。其の理由は次の如くである。即ち準備金は過去に於ては重要であつたが、現代に於ては不必要であり、國民經濟上有害であるのみならず、亦絶對的にも不充分であつて、財政上の需要に應じ難い。<sup>13)</sup> 従つて問題となるのは租税と國債との比較である。租税に依つては國債に於けるが如く、迅速且つ大量に所要の収入を得ることが困難である。<sup>14)</sup> 更に起債に要する費用は徵稅費よりも少くて足る。加之、國債による時は外資の援助を受けるの利益もある。この故に國家は國債によりその目的を最も合目的に遂行し得るのである。

次に現代の税制は完全なものであるとは決して云ひ

得ないから、若し非常緊急の際に必要な經費をすべて租税に求める場合には、負擔の一層の不平等を招來する譯であり、同時に各個經濟に急激なる變動を與へるが故に、公平負擔上よりも亦國民經濟上よりも好ましからざる結果をもたらすのである。これに反し國債に依る時には、最も損失の少い所から所要の經費を得ることが出來、且つ收益の上らぬ負擔を長期に分つて負擔せしめる故、國民經濟上及び公平負擔上に於て上述の如き租税による不利を避け得られる。

**C 社會政策上** 國債はしばしば社會の不平等を促進するとの非難を蒙るのである。即ち國債の存在は、大多數の國民の所得の大部分をして國債所有者なる有閑階級の手に移らしめ、不勞所得を増大し、かくて貧富の懸隔を甚だしからしめると云ふのである。これに對しディーチェルは、次の如く國債を辯護してゐる。<sup>15)</sup> 彼に従へば、右の考は一面的な、黨派心に囚はれた見地に基くものであり、經濟發達の必然的な過程の完全なる誤解より來るものである。元來國家經濟は國民全體の共同經濟に外ならぬが故に、國家に對する債權者、換言すれば國債所有者より眞に資本を借り、そ

12) Dietzel, a. a. O. s. 221.  
13) Dietzel, a. a. O. s. 157.  
14) Dietzel, a. a. O. s. 158.  
15) Dietzel, a. a. O. s. 205—206

れが利用を享受し居るものは、國民であり一般納税者なのである。故にすべての信用業務に於けると同様、この場合に於ても國債より受ける利益は相互的・二面的であり、一方が利し他方が失ふものでは決してない。更に國債利子の可成り大なる部分が、餘り富裕ならざる人々の手に入り來ることを考慮せねばならぬ。蓋し、彼等は自ら企業を営むの能力乏しく、その有する小資本を國債に投すること多きが故である。

猶注意すべきは、國債はその性質上多く内地で起され、従つて債權者の大部分は國民なることである。このことは生産的勞働者の所得をして不生産的消費者の手に渡らしめると云はるゝ國債の短所を二重に緩和する。即ち第一に、利子は國內で消費せられ、従つて生産的利得を増すのである。第二に、國債所有者が利子として受取るものは租税であるが、その租税の大部分を彼等自ら負擔する。

右の如き理由により國債は一見考へらるゝ程には、社會の不平等を促進し、階級の對立を激成するものではないと云ふのが、デューチエルの意見である。

D 政治上 國債は政府をして浪費をなさしめ、

或は輕々に戦を起さしめるとの非難を往々にしてなすものがある。然しデューチエルによれば、この非難は國債制度の本質には當らぬ。政府の浪費その他の生ずるのは、統治權の組織が誤つて居り、その職分が意識的又は無意識的に誤解さるゝか、又はこれを遂行しようとしてせられない結果である。それ自身如何に良く、且つ賞讃に値するものでも濫用せられることのあるのは、有り勝ちのことである。それ故問題は寧ろ統治權の組織の改正に存し、國債とは沒交渉である。<sup>16)</sup>亦國債にかゝる危險が伴ふことを假に否み難いとしても、このやうな不利は國債の有する幾多の利點により充分に補はれて餘りあるものであると云ふ。

デューチエルは却つて國債の有する政治上の利點として次のものをあげてゐる。即ち高い租税が政府に對する不平反感を國民に起さしめるに反し、國債は國民大多數の關心をして現在秩序の平穩なる存續に向はしめると説く。<sup>17)</sup>

E 道義上 國債は現代の負擔を後代に残すが故に不可なりとの道義上の非難あるに對し、デューチエルは以下の如く國債を辯護する。右の非難は後代の人

16) Dietzel, a. a. O. s. 179.

17) Dietzel, a. a. O. s. 180.



々は國債を償還しなければならぬ、それ故に後代の不利は甚だ大であるとの假定より生じてゐるのである。然しながら國債は必しも償還される必要はないのであり、たゞそれが國民經濟にとり有利な場合に初めて、償還が必要となる。

國債が道義上の非難を受ける場合、要するに租税により一般納税者が急激且つ大量なる資本の控除を受け經濟上不利なる立場に立たされると、起債により遊資の所有者が一般納税者のために前拂ひして置きこれに對し利拂を受けるのと、この兩者の中で何れが是なりやの問題である。若しも負擔を後代に残すが故に後者を非なりとするならば、家父たり工業者たるものが、非常に必要な、又は非常に大なる利益を約束する所の新しい生産補助手段、例へば機械の如きを得て、その固定資本を増大するがために資本を借りることをも非なりとせねばならないのである。これによつても知らるゝが如く、國債に對する右の如き非難は當らない。<sup>18)</sup>更にまた經濟は發達して止まぬものであり、負擔は將來に於て輕からんとする傾きあることをも忘れてはならないと説く。

### (三) 國債起債の限界

上述の如くデューチエルは國債の長所を發揮し、その短所を擁護するに努めたけれども、而も國債の起債に一の限界を置くことを忘れなかつたのである。その限界と云ふは、國債激増の結果として國債利子支拂のための租税の徵收が困難となり、個人經濟に本質的な損害を及ぼすに至ると云ふ點である。故に國債利子の支拂ひに用ひられる租税が容易に徵收せられて居れば、それが資本の生産的効果の繼續してゐる徵證であり、然らざる時には資本の生産的効果は消失せるものと看做されなければならない。而してこの限界は彼に従へば確定せるものではなく、全く動搖的のものであり、その當時の國民經濟の事情のみならず、又租税制度の善惡にも依存するものである。<sup>19)</sup>この限界の意味は結局に於ては、私經濟の場合と同様に公經濟に於ても固定資本と流動資本との間に相當なる均衡を要すると云ふことである。蓋し國債として國民資本に投下された部分の利拂のために必要な租税を納めることを可能ならしむるためには、それを産み出す源泉たる資本の一部が個人經濟に存留されなければならぬからである。

18) Dietzel, a. a. O. s. 182—183

19) Dietzel, a. a. O. s. 213.

### 第三、結 言

前章に於て私はデューチエル國債論の概要を明らかにしたのであるが、以下神戸博士<sup>20)</sup>、小川博士<sup>21)</sup>、ワグナ<sup>22)</sup>、マンゴルト<sup>23)</sup>、ナッセ<sup>24)</sup>等に従ひ、簡単に彼の説を批判して見よう。

先づ第一に、デューチエルが國家經濟と國民經濟との緊密なる內的聯關の認識の上に立つて、國債の有する幾多の長所を明らかにしたこと、第二に、經費の効果の持續による區別に基いて經費充足の原則を樹立し、これに従つて租税か國債かの問題を解決せんと試みたこと、第三に國債の資金が生産資本にあらずして遊資なることに着目したこと、以上の三者は彼の卓見であり、公債學説の發展に大なる寄與をなしたものと云はなければならぬのである。この意味に於て彼は公債學説史上最も重要な地位を占むるものである。

然しながら彼は國債の長所を高調し、その短所を擁護するに急なるの餘り、極端に走れるの譏りを免れ難いのである。即ち彼は固定資本のための經費はすべて

これを國債に依るべし、臨時費はすべて國債に依るべしと主張するのであるが、斯くてはいきほひ國家信用の濫用に陥り、國家經費充足の嚴格且つ明確なる原則の可能性は失はれることとなり、健全なる財政々策の破綻を意味するに至る。

更にデューチエルは國債が常に遊資を吸収するものと假定の下に立論してゐる。この遊資に着目せることは卓見として認むべきであるが、元來國債の應募なるものは外資、遊資及び既に生産業に投下せられたる資本の三者の中の何れかよりなされるものである。而して遊資は彼の説くが如く常に豊富なるものではなく、從て國債は既に生産業に投下せられたる資本を奪ふに至り、國民經濟に不利を與ふことも少くない。

要するにデューチエルの國債論は公債學説史上最も注目すべきものであり、幾多の長所を有するものであるけれども、決して完全なるものではなく他の學者の修正を俟つて始めて適用さるべきものである。

20) 神戸博士、財政學大系、公債論 21) 小川博士、公債論

22) Wagner, Die Ordnung des österreichischen Staatshaushalts.

23) Mangoldt, Art. Kredit in Bluntschlis Staatswörterbuch 6.

24) Nasse, Steuern und Staatsanleihe. Tübinger Zeitschr. f. Staatsw. 24.